

〈巻 頭 言〉

公衆衛生の原点：廃棄物学

鈴木 武夫

この数年、廃棄物についての社会的関心は急速に強まった。それは今迄の廃棄物についての私達の無策の付けが、次の様な事情によって、一気に吹き出したと考えてもよいと思う。すなわち、(1)廃棄物処理(処分)の無計画性による処分場確保の困難、(2)廃棄物の有毒性の認識と対応の遅れによる国民の安全、健康への危惧の表面化、(3)地球規模環境問題の世界的提起による資源有限性の再認識、省資源、省エネルギーの必要性確認、現在のライフスタイルの反省の動き等であろう。

地方自治体はすでに、衛生工学の技術の可能のかぎりの応用によって、廃棄物行政を行ってきたが、上述の諸要因への対応には限界に達してきたと思わざるを得ない。

すでに少数ではあるが予見性をもった研究者は今日の状態の到来を憂慮し、この状態に対応すべき科学分野の創設と展開を要求し、自らも努力してきた。やっと、1990年に多くの方々の理解を得るに到って、廃棄物学会が創立され、活動を開始している。

廃棄物といえば、ほんの少し前までは、消費生活の結果の不用物と考える人が大部分であった。産業廃棄物、有害廃棄物といったものは、その取り扱い責任者の関心事にすぎなかった。それが、大量生産、大量消費、そして必然的に大量廃棄のライフスタイルの時代に入って、廃棄物についての関心は一般化した。そしてやっと、考え方も“量が質への転化”をうながすことになった。

かつて、廃棄物は自然の自浄作用で処理してくれ、物質の自然循環の中にくみこまれてゆくと思われていた。それが、私達は自然の能力以上の量を発生させ、物質の質も多種多様になってくることにより、自然の能力に処理を依存する事は不可能になってきた事を知るに到った。自分で行ったことは自分で対応せねばならぬことにやっと気づいた。

廃棄物は何も消費生活からのみ発生するものではない。人間の行為の総てから発生する。資源、生産と作業、流通、回収、処理(処分)の各段階で廃棄物は発生する。それは各段階で不用と思われたものは、他の面からみて有価物(財)であっても、廃棄物として取り扱われる。そして、合法、不法であろうと回収、処理の段階にまわされる。廃棄物というものがもともとあるというよりも、時代の考え方の背景のもとで、廃棄物と評価されたものが廃棄物であるというべきであろう。

廃棄物は一般的に上述の夫々の段階で、その物を取り扱う人に、またある環境媒体にとりこまれまたは媒体間を移動して環境を汚染して地域住民に、安全、健康、福祉の面で悪い影響を与える。更に廃棄物処理において新しい有害物質を生成する事もある。

廃棄物学は、物の流れにそって起きてくる諸問題を物の中軸として考究する。そして、人間の活動、行動と安全、健康、福祉を現在及び将来を視点の中に見据えて研究する必要がある。そのために広い範囲にわたる自然科学、人文科学のすべてを動員した総合科学としての性格をもつのが廃棄物学であろう。

廃棄物学は人が行動し、生活すれば必ず発生する物への接近をはかる学問分野であり、そのとき、人の安全、健康、福祉が焦点となるのであるから、まさに公衆衛生学の原点に一致する。または公衆衛生学の原点を忘れた廃棄物学はあり得ないと思う。

頭で描く事は出来ても、これを具体的に総合科学として構築するためには大きな、困難な作業となろう。関係者の御努力に大きな期待を寄せたいと思う。